

「無」の概念に関する認知的考察 - 東西文化の比較

このワークショップでは、「無」又は「空」に関する概念を認知科学を基に学際的に考察します。また、ここでは特にユーラシアにおける東西の文化の比較を行います。「無」に関する概念は、文化によっては古代から学識者を悩ませてきたものです。現代ヨーロッパの学問の基礎を構成したといっても過言ではない古代ギリシャにおいても、「無」とは不吉なもので研究対象にはなりませんでした (Seife 2001)。しかし、ユーラシアの東部では、言語も含めた文化の中に「無」の概念が浸透していったと考えられます。この場合の顕著な例としては仏教哲学における「無」の考えが挙げられますが、これに限らず他の知的、芸術分野にもこの考えは見られます。

人間の認知能力全般を考えると、この「無」の概念に従いものの見方が異なるという場合があります。図と地の関係で視覚を考えると、西洋文化圏で生まれ育った人は、図に注意を払い地をそれほど気にしないといわれています。これとは対比するように、東洋文化圏生まれの人は、地のほうにもある程度の注意を払います。これは心理学の実験で、写真をどのように見るかを視線を追跡する結果得られています (Nisbett 2003; Nisbett and Masuda 2007)。つまり、東洋人は背景にも十分に注意を払っているということです。このほかにも、芸術作品の構造や文学作品の構成など、東洋文化では、「無」に関する概念をいろいろな所に意図的に配置し、それが芸術や人々の美的感覚の一部を構成しています。

この様に、「無」に関する概念は宗教や芸術活動だけでなく、人々の認知活動全般にも影響を与えているようです。このワークショップでは、どれだけ広くの範囲にこの概念がどのような分野で見られるかを考察し、スウェーデンなどの北欧などの地域的な例外なども見ていきます。発表は、以下のよっつのテーマに分かれます。

序論的テーマでは、視覚・聴覚の考え方を認知言語学でよく用いられている図と地から考え、その顕著な例などをインド・ヨーロッパ語と日本語の文学や芸術を中心に考えていきます。また、ここでは西洋文化における「無」の概念も論じます。北欧、特にスウェーデンでは、*Iagom* という概念があります。これはよく翻訳不可能な語とスウェーデンでは言われていますが、日本語では可もなく不可もなくに近い意味の言葉です。この言葉の語源と東洋の関連性にも言及します。

仏教哲学に関しては、唯識哲学について考察します。この考えでは、世界は一人一人が自らの深層心理によって作り上げたもので、そこにあるのは識のみで外界は存在しないと主張します。この唯識学派の非実在論に対して、実在論を主張するバラモン教の流れをくむヴァイシュニキ派の対立の根底にはことばに対する認識の違いが認められます。この点を、「無」の概念を中心に分析します。

日本文化に関しては、日本文化の重大な形成要素ともいえる「空」の概念を「無」の概念と比較しながら歴史的に見ていきます。特に古代神道のテキストとして残る『古事記』・『日本書紀』を中心に、「空」という単語の用法と意義を考察します。「空」とは「なにもはいていないスペース」という具体的な意味で使われている一方、敬称を表す合成語の中にある「空津日子」と同様に抽象的な用例もあります。記紀神話の思想的背景にある宗教、とくに仏教や神道的背景と「空」(sunyata)の概念を受け入れる思想の流れを考察し、古代テキストに見られる「空」という単語の意味の範疇拡大と抽象化を検討します。

言語に関する点では、数字と無の概念に関して、数の数え方を考えます。数の数え方は大きく分けて二種類あり、数詞を使うか使わないかで classifier (すべての名詞に数詞を用いる) と non-classifier (可算名詞と不可算名詞を別に扱う) に分けられます。東洋文化圏で話されている言語は classifier 言語が多く、可算名詞でも、文法上は表されているものを数えられるものでなく物質の量と見ていて、ひとつひとつの区別をしません。この地域では、仏教や儒教の教えが浸透している地域です。これは、還元主義、全体論的な世界観によるものと考えられます。これらの世界観を「無」の概念と関連づけて考察します。

参考文献

- Nisbett, R. E. 2003. *The Geography of Thought*. New York: Free Press.
- Nisbett, R.E. & T. Masuda 2007. 'Culture and point of view.' *Intellectica* 2-3, 46-47, 153-172.
- Seife, Charles 2000. *Zero: The biography of a dangerous idea*. London: Souvenir Press.